

源氏物語研究



文学博士 島津久基
文学博士 山岸徳平 著
文学博士 池田亀鑑

有 精 堂 選 書

源氏物語研究

文学博士 島津久基

文学博士 山岸徳平 著

文学博士 池田亀鑑

*

解 説 秋 山 虔

有 精 堂

有精堂選書

源氏物語研究

印 検

著者略歴

島津久基―東京大学卒。東京大学教授。文学博士。昭和二十四年没。
〔著書〕「義経伝記と文学」「源氏物語講話」「国文学の新考察」「日本文学論」など。
山岸徳平―東京大学卒。実践女子大学学長。東京教育大学名誉教授。文学博士。
〔著書〕「河内本源氏物語序説」「梟中納言物語全注解」「八代集全註」「日本古典文学大系」「源氏物語」1、5など。
池田亀鑑―東京大学卒。東京大学教授。文学博士。昭和三十一年没。
〔著書〕「宮廷女流日記文字」「伊勢物語に就きての研究」「古典の批判的処置に関する研究」「源氏物語大成」など。

昭和四十五年七月二十日発行

定価一八〇〇円

著者

島津久基
ししまづ ひきもと

山岸徳平
やまがし とくへい

池田亀鑑
いけだ かん

発行者

山崎 誠

印刷者

株式会社 井村印刷所

発行所 有精堂出版株式会社

東京都千代田区神田神保町一の三九
振替口座 東京四〇六八四番

◇乱丁・落丁本はおとりかえいたしません。

3393—550515—8610

目次

源氏物語研究	島津久基	一
--------	------	---

源氏物語評論	島津久基	四九
--------	------	----

—客観小説としての源氏物語付物の哀れ論—

源氏物語研究	山岸徳平	一〇五
--------	------	-----

第一章 源氏物語の本文	一〇六
-------------	-----

一、紫式部と源氏物語の創作	一〇六
---------------	-----

二、本文の五十四帖	一一一
-----------	-----

三、雲隠の巻・山路の露及び手枕	一二九
-----------------	-----

四、源氏物語の諸本	一二六
-----------	-----

五、河内本と青表紙本の差異及び源氏物語絵巻	一二三
-----------------------	-----

第二章 源氏物語の注釈書の研究	一二七
-----------------	-----

一、伊行及び俊成と定家の注釈	一二八
----------------	-----

一、源氏物語釈	一三六
---------	-----

二、源氏秘伝書	一四〇
---------	-----

三、奥入	一四〇
------	-----

四、光源氏勘用集	一五一
----------	-----

ニ、水原抄・紫明抄及び原中最秘抄……………一五二

一、水原抄……………一五一

ニ、弘安源氏論議……………一五四

三、紫明抄……………一五八

三、仙源抄と類字源語抄……………一七五

一、仙源抄……………一七五

ニ、類字源語抄……………一八一

四、河海抄源氏談義及び兼良の注釈……………一九五

一、河海抄……………一九五

三、源語秘訣付口伝抄……………二四〇

ニ、源氏談義……………二〇六

六、源氏物語之内不審条々……………二五五

三、源氏和秘抄……………二二六

七、源氏物語年立……………二七〇

四、花鳥余情及び異本花鳥余情……………二二八

第三章 中期に於ける注釈書……………二二九

一、宗祇の注釈書……………二四〇

一、種玉編次抄……………二四三

三、紫塵愚抄……………二四九

ニ、源氏物語不審抄……………二四七

四、雨夜談抄……………二五四

ニ、宗祇一派の注釈書及び一滴集……………二五六

一、弄花抄……………二六二

五、宗碩抄……………二六一

ニ、源氏花錦抄……………二五九

六、源氏男女装束抄……………二六二

三、一葉抄……………二五九

七、紹巴抄付休聞抄と林逸抄……………二六二

四、薄紫……………	二六
-----------	----

三、三条西家及びその系統の注釈書と岷江入楚……………	二六六
----------------------------	-----

一、細流抄……………	二六六
二、明星抄……………	二六七
三、山下水……………	二六八
四、覺勝院抄……………	二七〇
五、孟津抄……………	二七三
六、三源一覽……………	二七四
七、花屋抄……………	二七六
八、萬水一露……………	二七九
九、岷江入楚……………	二八〇
一〇、源義弁引抄……………	二八二
一一、湖月抄……………	二八三
一二、源氏物語掬水抄……………	二八五
一三、源氏一簣抄……………	二八七
一四、窺源抄……………	二九〇

第四章 新注の研究付拾遺…………… 二九二

一、源注拾遺……………	二九三
二、源氏物語新釈……………	二九三
三、玉の小櫛付玉の小櫛補遺……………	二九四
四、源注余滴……………	二九四
五、源氏物語評釈……………	二九五

源氏物語の構成とその技法…………… 池田 亀鑑…………… 三〇一

一、序説―源氏物語各巻の孤立性と相關性……………	三〇二
二、長編的性格と短編的性格……………	三〇六
三、短編中編および長編説話群の解体……………	三二三
四、短編および中編各説話の諸相とその成立……………	三二六

解 索

引 説

引……………秋 山 虔……………四三七

六 物語構成の技術とその効果……………四一六
 七 結語——源氏物語的構成はいかにしてなされたか……………四二〇

- ⑤ 藤壺物語……………三六三
- ⑥ 長編的各説話の諸相とその成立……………三六七
- | | |
|------------------|--------------------|
| 1 葵上物語……………三七 | 6 雲井雁物語……………三九 |
| 2 六条御息所物語……………三六 | 7 玉鬘物語……………三九〇 |
| 3 花散里物語……………三七 | 8 近江君物語……………三九 |
| 4 筑紫五節物語……………三八 | 9 藤典侍物語……………三六二 |
| 5 朝顔物語……………三四 | 10 朧月夜尙侍物語……………三六三 |
| ⑥ 葵上物語……………三九〇 | |
| 7 明石上物語……………三九六 | |
| 8 女三宮物語……………四〇四 | |
| 9 浮舟物語……………四一一 | |

源氏物語研究

島津久基

源氏物語は小説である。と斯う言つたら笑はれるだらう。併し昔の人は思ひきつて無遠慮な笑を同音に爆發させなかつたらうことも真実であらう。今鏡に所謂「作り物語」即ち仮作物語即ち小説の雄として、大体一般に迎へられてゐた事は誤り無い。さればこそ狂言綺語の偽りは作者式部を六趣の苦患に陥れ、聖覚法印が供養の諷誦に法の教を仰がしめたのである。けれども亦一方、既に源氏が創作せられた当時にあつてさへ、日本紀の筆才に傳へられねばならぬほど、史書との限界が一般読者の——一般作者にすらも——意識に劃然としてゐなかつたのも事実であり（今日だつて歴史と文学と伝説とを同一視して少しも怪しまぬ堂々たる政治家が未だあるのに驚嘆したことがあるが）、更に後になると所謂准擬問題で滑稽な煩瑣^{うざ}い推しあて（例へば、桐壺帝は醍醐天皇或は桓武天皇、源氏は嵯峨天皇或は光右大臣又は西宮左大臣であるとするなど）が旧注どもに簇出して来たのは、一面源氏の写真小説としての成功を反証してゐるものでもあるが、地下の作者の微苦笑も想ひやられる。それも無理もない。源氏ならまだしも、童話的、幻想的な竹取物語をすら諷刺文学といふ見地から、作中の主な人物に実在した人名が借りられてあるまゝ、飽くまで史實的解釈批判の眼で観ようとした竹取物語考の加納諸平のやうな学者が、近世の而も鈴屋系に出たほどであるから。（諸平の研究は別の意味で面白いものであるが）

さう思ふと、玉の小櫛の鈴屋の大人の卓見と明快な論断とに、やはり推服せずにをれない。小櫛の論は決して単に所謂「物のあはれ」論の一語を以て蔽ひ尽くされる底のものではない。もつと複雑な深みを有つ立派な小説論である。いろ／＼な大切な問題を含む堂々たる文芸批評論である。又それよりも六百年も昔に

「さて此の源氏作り出でたることこそ、思へど思へど此の世一ならず珍らかに思はゆれ。誠に仏に申し乞ひ

たりけるしるしにやとこそ覚ゆれ。それより後の物語は、思へば易かりぬべき物なり。かれを才覚にて作らんに、源氏に増りたらん事を作り出す人ありなむ。僅に宇津保、竹取、住吉などばかりを物語とて見けむ心地、さばかりに作り出でけむ、凡夫の仕業とも覚えぬ事なり。」

と、源氏を激賞した無名草子の著者は、亦確に凡眼では無かつた。多少煩ひとはなつてゐる仏説的の見解なり気分なりを除去しても猶、徒らに無自覚に盲信的に源語崇拜の世潮に阿付してゐるのではなくて、それは、ほんたうに源語の美にうたれ、偉に心から驚き、芸術の神境に悟入する魂を揺り動かされ、数多度繰返しては此の大芸術の奇蹟的な出現を訝り称へる歓喜の中から発した感歎の声である。これも亦真に源氏を知る鍾子期の一人であつたと言はねばならぬ。

それにつけても、日本紀を「たゞ片そばざかし」と言ひ棄てた人は、全く恐しい程に心にくい天才であつた。そして「かれを才覚にて作らんに、源氏に増りたらん事を作り出」した人に誰があつたか。

「大和唐土、古へ今ゆく先きにも、たぐふべき書はあらじとぞ覚ゆる。」

といふ宣長の詞は蟲眞目があるとしても、誇張とばかりは見流されまい。

「度毎に初めて読みたらしむ心地して、珍らしくおかしくのみ覚ゆるにも、いみじく勝れたる程は知られて、返すくめでたくなむ。」

と鑑賞の総合経験に立脚しての論断は、恐らく動かぬところ、そして序でに此の芸術値の評定に関する創見が、偶合とはいへ、リテラリイクリティシズムのウインチェスター教授に其の儘翻訳されてゐるやうな感じがしてならぬ。いのも愉快である。

源氏物語は写実小説である。逍遙博士の小説神髓に現世物語即ち世話小説の典型として

「専ら上流の情態を写せる好き世話物語と称しつべし。」

と道破されてある通り、宮廷生活を中心としての平安世相の活写である。小櫛の評したやうに

「あるは珍らかに興ある事をむねとし、おどろ／＼しきさまの事多くなどして」

といふ源氏以前の童話的伝奇小説竹取や、宇津保の俊蔭や、或は継子童話の小説化された落窪や——これらにあつても、併せて世相は映写されてゐるが——に比べると、全く

「初めより終まで、たゞよのつねの、なだらかなる事の、同じやうなるすぢをのみ」

書き続けられ、而もそれが、紫女自身の言葉で言へば、

「善きも悪しきも、世に経る人の有様の、見るにも飽かず、聞くにも余る事を、後の世にも言ひ伝へさせまほしき節々を、心に籠め難くて言ひ置き始め」

た「この世の外の事ならぬ」実人生の描写である。

「蜚巻」に源氏の口を藉りて斯く小説の本質論に言及した作者は、理想の女主人公紫上の幸運な立身に対して、

「昔物語に殊更に作り出でたるやうなる御有様なり。」（賢木巻）

と評注を付して、故意に樹てたといふものの、かなり不自然さを自分でも感じてゐる構想に、老獪な自家弁護を試みてゐる。勿論それで自分の懐抱してゐる小説本質論と撞著するといふ程、自身の芸術及び芸術観を偏狭なものとは思つてゐない筈ではある。が又、それほどに所謂「昔物語」（此の語に就ては、日本文化講座第一巻拙稿）は、なだら

かな自然さ、現実味が不足してゐたのはほんとである。わざとらしい作意、誇張された滑稽、怪奇的な幻想、類型的な性格境遇などに始終出くはしてばかりゐるのも事実である。つまり「殊更に作り出でたる」と、あるがまゝの人の世との相違、これが大体に於て、昔物語の世界と源氏物語の世界——昔物語の表現と源氏物語の描写とを区劃し、対比させてゐる最も主要な点の一だと言ふ事が出来よう。

但し、紫式部の写実主義は、決して唯皮相浅薄な写実ではなかつた。

「さてこの偽^{いつはり}どもの中に、実^{まこと}に然^{さう}もあらむとあはれを見せ、つきつゝいふ続けたるはた、はかなしごとと知りながら、徒らに心動き云々」(簞巻)

といふ急所を擱んでゐた。

三

源氏物語は理想小説である。故藤岡博士は国文学全史平安朝編に於て、特にこれを強調してをられる。作者の本意は婦人論の具象化に在るといふのが其の主旨である。故芳賀先生は「各種の恋を写さんが為」と論ぜられた。

(国文学史概論)五十嵐博士は作者の主義理想が明示せられてゐない事を説かれた。(新国文学史)何れも的つてゐると言へる。「物の哀れ」説は余り知られ過ぎてゐよう。古来、仏理説や勸懲説など、或は宗教的因果観から、或は儒家的倫理観から、種々の牽強的な臆断が屢々加へられて来た事も、そして今では殆ど顧みられなくなつた事も、改めて述べなくてもよからう。只、近藤芳樹の源語奥旨の、紫女を以て、「王室の衰微を憂ふる大志」から、此の物語を作つた慷慨の烈婦と判定した奇抜な併し真摯な意見などを、珍らし過ぎる理想小説論の一として注意して置くに留めよう。

源氏物語の作者は人生批評家であつた。品定の婦人論など、千載の後の今日を以てして猶且読者をして首肯歎服せしめる不易の真理と事実と理想と批判とを有つてゐる。其の作者が源氏物語の中に、幾分個性味を具へさせつゝ、同時に女性の各種の或類型を——あらゆる種類の女を——描き出さうと試みてゐる事は確に看取せられる。源氏が性格小説としても観られ得る所以である。

源氏物語の作者は人生鑑賞家であつた。特に情趣生活に対する豊かなそして繊細な味解者であつた。時代の人であるが故ではあるが、又其の中での特に選ばれたる一人でもあつた。源氏物語は作者が外から此の情趣を享受し鑑賞した心象の忠実な記録であると共に、亦内に自身創作し生み出した情趣の世界の展開表現である。「物の哀れ」説の起る所以である。其の物の哀れの極致、具象化たる恋愛を、主題として取扱はうとした事、そして出来る限りさま／＼の恋の相と場面とを見せてみようとしてゐる事も否定する事は出来ない。源氏が恋愛小説である事は、漠然と外面的にだけの称呼でなく、此のもつと簡単でない意味を含めても、誤り無く肯定されねばならぬ。

源氏物語の作者は或宿命観と信念と倫理的意識と人生意理想とを把持してゐた事は窺知し得られる。唯それは時代の教養と慣習とに多く依拠してゐるものではあつたが、單純にそれに信従し、悩みも疑もなく柔順になごやかに、導かれるまゝに満足してゐたとのみは思はれない。もつと深いもの、もつと正しいもの、もつと真のもの、もつと善いもの、もつと美しいもの、もつと尊い高い何ものかを、求め懂れて苦しんでゐる心持を想見し感ずる事が出来るやうに思ふ。而もそれが果し得られない現実の矛盾、悲愁の中に、猶意味と歎びとをすら見出さうとし、又見出したと思つた時、光と生命とを信じようとし、又信じ得たと感じた時、さうして又それが瞬時にして夢のやうに淋しく消散した時、かくて果てしなく繰返され営まれて行く人間苦行の傷ましい嬉しさ、生ける者にのみ恵まれ負はされてゐる辛い幸福、運命の令する前には、悔やしくも何うにもならぬ惨な人の力、それでゐてその運命を自身支配

したいおふけ無き併し強い願、一言にして尽くせば、即ちやはりあくまでも人間的な——女性的であるが同時に人間的な——生命の、自らを訓へ、自らを戒め、自らを慈しみ、自らを慰め、自らを励まし、自らを寄託するよるべ、而して又、人に訴へ、世に我を頌たうとするたつき、五十四帖の大編に、作者式部が懸けてゐた慎ましくおとなしい、併し誇らしく大きい望は、決して軽々なものではなかつたと揣摩し得る。それは物語、小説の創作欲、並びに物語文学、純芸術小説の完成といふ大抱負と別に（勿論それと切り離されないが）、作者の芸術観及び作品を通して想測し得られると思ふ。光源氏の理想化、紫上の理想化にも（童話的、伝奇的昔物語の慣習から離脱しきれない意味から来てゐる分子も含まつてゐるが）、物の紛れの業報宿因も（時代信仰のあらはれで、又説話構成の興味も手伝つてはゐるが）、作者の或用意、或冀望に根ざしてゐないとは、どうしても考へることは出来ない。少くとも式部の描いた物語の世界は、彼女の環境の忠実な写生のみではない、彼女の翹望して止まない理想の世界を現実の世界の上に載せ重ねて観たい、現に観てゐると信じたい、或は自由な空想の中で渾一に融け合はさせよう、と努めてゐる、と言ふ事だけは言ひ得るであらう。

只、五十嵐博士の言のやうに、作者の主義理想が、霧骨に或特殊の姿をして顔を出してはゐない。併しそれが即ち源氏物語の小説としての芸術値の高い所以である。

私は言ひたい、紫式部は源氏物語に於て、やはり「人生」を描いた、又描かうとしたと。「人間」を描かうとしたと言はんよりは、「人生」といふものを観ようとし、解しようとし、味ははうとし、批評しようとし、表現しようとしと言ひたい。

人生を忠実に描いた。だから写実小説なのである。

人生を、正しく描かうとした。表現しようとした。批評しようとした。だから理想小説なのである。

人生を觀照するのに、式部は人生の最も如実に且複雑に微妙に現れてゐる「恋愛」を通して試みようとした。だから恋愛小説なのである。抒情小説なのである。

人生が描かれた。だから生活がある。平安朝生活がある。人生が描かれた。だから人間がある。女がある。人生が描かれた。だから真実がある。生命がある。光がある。だから教訓がある。だから興趣が尽きないのである。

四

源氏物語は心理小説である。事件の展開は興味の重大な焦点とはせられてゐない。作者は「人生」を單に事件によつて解釈し説明する事の不自然さ不可能さをよく知つてゐたやうである。勿論人生に「事件」を認めてはゐる。けれども作者はもつと自然で且正確な方法によつて、人生を叙述しようと試みた。「事件」よりも「人間」を觀察することによつて、又「人間の業績」によりも「人間の心」に於て眞の「人間」を觀、「人生」を知らうと努めてゐる事は、源氏を披けば直に感知し得られるところである。心理の複雑微妙な動きを透徹して觀察し、精細に描出してゐる点が、源氏の特に傑れた、和漢今古に類を絶した最大値であるとは、既に小櫛に最も力説せられてゐるところである。

「さて又万づよりもめでたき事は、先づからぶみなどは、よに勝れたりといふも、世の人の、事に触れて思ふ心の有様を書ける事は、唯一わたりのみこそあれ、いと粗く浅きものなり。すべて人の心といふものは、漢書に書けるごと一かたにつきぎりなる物にはあらず、深く思ひしめる事にあたりては、とやかくやと、くだくしくめくしく、乱れ合ひて定まり難く、さまざまの限多かるものなるを、此の物語には、さるくだくしき限々まで、残る方なく、いとも委しく細に書きあらはしたる事、曇り無き鏡に映して向ひたらむが如く云々」

といふ背繁を得た論評に、一語を加へる要を認めぬ。其の論証となるべき適切な実例も余りに多過ぎる。

「かゝる筋は、まめ人の乱るゝ折もあるを、いとめやすくしづめ給ひて、人の咎め聞ゆべき振舞はし給はざりつるを、あやしきまで、今朝の程、昼間の隔も覺束無くなど、思ひ煩はれ給へば、且はいと物狂ほしく、さまで心留むべき事のやうにもあらずと、いみじく思ひさまし給ふに、人のけはひ、いとあさましく柔かにおほきて、物深く重き方は後れて、ひたぶるに若びたるものから、世をまだ知らぬにもあらず、いとやむことなきにはあるまじ、何処にいと斯うしも留まる心ぞと、返す／＼思す。」

これは「夕顔巻」の源氏の夕顔上に対する心持を写した一節である。

かういふ愛欲の道には、どんな実直堅固な人でも、ふとした機みで、つひ踏みこたへられずに迷ひ入る事もあるのに、今まで感心に我と抑制して、兎に角他人からもどかれるやうな失態は先づ演ぜずに済ませて来たが、今度に限つて不思議な位、女の事で自分の心は全く支配されきつてしまひ、分秒の間ももう離れては生きて行けないやうな気がして独りで苦しむ側から、頻りに焦々した気持に興奮して来て、なかに、あんな女にと、自分で自分を叱りつけ窘める程、あやにくに益々はつきりと、何処やら大様で、おとなし過ぎる位柔順な懐かしい人の姿が眼にちらつく。分別こそ少し深くない方ではあるが、まるで子供々々した中に、異性をもう知らぬではない素振が仄見える。きつとそんなに身分の高い者でないにはきまつてゐるが、何処にかう牽きつけられる自分の心であらうと、繰返し／＼源氏は思ひ続けるのであつた。

といったやうな意味の叙述である。又同じ巻で大体、夕顔上と対立してゐるといふべき六条御息所に対する源氏の態度については、

「六条（御息所）わたりにも、解け難かりし御気色をおもむけ（靡かし）聞え給ひて後、ひきかへし（手の裏

返して）なめ（冷淡）ならむは、いとほし。されど余所なりし（御息所が打解けて来るまでの）御心惑ひ（源氏の熱心さ）のやうに強^きなる事は無きも、如何なる事にかと見えたり。」

といふ自然な心理過程を捉へて写してある。其の他誰も知る空蟬の悶え、藤壺の悩み、或は薫の淋しさ、浮舟の苦しみなどは、言ふまでもなく入念に描写の力が注がれてゐる。

果林子は淨瑠璃の精神を入るゝ暗示を之に得たとして、源氏の「末摘花巻」（但し、書名を明示してはゐないが）の擬人の手法を称揚してゐるが、紫式部にあつては、恐らくそれは大して自分では氣にも留めてゐなかつたところかも知れない。無論彼女独特の表現様式でも何でもない。作者の心私かに企図し、自信と誇を有つてゐたであらうと想はれる点は、やはり宣長の指摘した内面描写にあつた筈である。面白い事には、恰も同じ此の「末摘花巻」に、流石の源氏を惘然とさせた所謂普賢菩薩の乗物にまがふ偉大な鼻の持主の容姿を写しながら、作者が特にことわつてゐる次の一語がある。

「著給へる物どもをさへ言ひたつるも、物言ひさがなきやうなれど、昔物語にも、人の御装束をこそは先づ言ひたれ。」

まことに昔物語は——そしてそれは昔物語に限らず軍記物や其の他後世の文学にまで及んでゐるが——先づ衣裳の外面描写から始まる、而も心理の内面にまでは立ち入らぬ、仮令触れても極く粗笨で皮相的なのが一般といつた有様である。さうして式部の物語小説の叙述、描写に於ける理想と用意とが那邊に在るかも、事実の上に併せ徴して、右の隻語の裡にもおのづから窺はれるやうに感ぜられる。

外面的といへば、複雑さを人間心理の動きに見出さずして、錯綜した事件の上に先づ求めようとするのを、却つて近世の読本、草双紙の類に於て殆ど当然の事実として観るやうなもの、興味の無い事はない。そして其の複雑な